Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

三四年六ヵ月の軌跡（杉之原壽一教授退官記念号）

杉之原, 壽一

(Citation)
社会学雑誌,3:2-8

(Issue Date)
1986-03-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010729

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010729

三四年六カ月の軌跡

杉之原壽一

定年退職に際し何か思い出をということだが、新たに名づけられた「実年」（よい名称とは思わないが）という年齢層の中堅であり、まだまだ過去を振り返るような気持ちはさらにない。しかし、これも通過儀礼の一つとあきらめて、筆をとることにした。

たまたま本誌の創刊号（一九八四年二月）に「部落問題研究三〇年――杉之原寿一先生にきく――」が掲載されているし、また『季刊・科学と思想』の第五九号（一九八六年一月）に「部落問題研究とのかかわり」と題するエッセイを書かされたので、私の研究活動の軌跡については、ここで改めて触れることは一切省略させていただく。三四年六カ月にわたる私の神戸大学での生活は、決して研究活動だけで貫かれていたわけではなく、部落問題などの調査研究活動を軸に何本かの糸で織りなされてきたといえよう。そこでこの機会に、その何本かの糸を引き

出して簡単に書きとめておきたいと思う。

第一の糸は、組合運動とのかかわりである。京都大学卒業（一九四七年）後、人文科学研究所の助手として京都大学教職員組合の活動にかなり積極的に参加するなかで、当時の組合の中心課題であった賃上げ闘争を通じて、給与の仕組みなどについて一定の知識をえることができた。その知識と経験が、一九五一年に神戸大学に転任する際に役立つことになった。大学在学中の兵役期間を京都大学とは異なり給与の算定基礎に算入しないという措置がとられたことに対し異議を申し立て、神戸大学当局と交渉を重ねたため、転任の発令が半年間おくれるということになった。最後には文部省の担当係官から私あてに直接文書が送られてきて、結局私の主張は容れられなかった。

しかし私は、これを契機に組合活動への意欲をますますかきたてられ、転任まもなく神戸大学教職員組合にも急速に接近、数年後には全学の書記長、委員長を相次いで引き受けさせられることになってしまった。もちろん神大教職組も、当時と今日とでは雲泥の差である。その頃文学部と理学部と教養課程の一部が同居していた御影学舎の四階の廊下の突き当たりを衝立で仕切って、そこに謄写版を置き、大学に泊り込んで自分でビラなどの原稿を書き、原紙を切り、ガリ版刷りで一枚々々仕上げたこと、メーデーとはいっても参加者はせいぜい一〇名あまり、それでも神大教職組の小さな旗をかついで誇らしげに行進したことなど、懐かしく思い出される。それから一〇年ほどのちに再び委員長をやらされたが、その時の印象はあまり残っていな

いのは、それなりに組織も拡大、書記局体制なども整備されたためであろう。その後、次第に組合活動の第一線からは退いていったが、一九七一年から一四年間にわたって闘われたいわゆる「一海裁判」においては、「神大教職組『七・一五訴訟』を支援する会」の最初と最後の会長としてかかわり、不当な最高裁の判決であったとはいえ、最後まで一海さんを中心に「愉快で楽しい」闘いを展開、敗北感もなく意気高らかに闘争を終結させることができたことも、生涯忘れえぬ思い出となるであろう。

組合といえば、一九五〇年代から六〇年代の前半にかけて民間の労働組合ともかなり接触、とくに松下電器産業労働組合と密接なかかわりをもっていた。ヒューマン・リレーションズを先駆的に取り入れた松下電器の労務管理を、社内報・社内誌のほか、入手した会社のマル秘文書などにもとづいて、組合の学習会などでしばしば批判しつづけていた。それが会社の知るところとなり、人事部長が神戸大学を訪れ、文学部長に「今後も続けるなら、神戸大学から人を採らない」と抗議するという一幕もあった。間もなく松下労組は急速に労使協調路線一色にぬりつぶされていった。当時の組合幹部で、その後、会社や電機労連の支援をうけて国会議員になった人、松下電器の重役に抜擢された人がいる反面、左遷されたり職場を干されたりして不当な差別的処遇をうけた人も少なくない。その中には新聞にも報道されたSさんのように、会社の不当な不利益処分に対し裁判闘争をも含めて二〇年以上も闘いつづけ、最近になってようやく勝利判決を勝ち取るというすばらしい闘いを展開した人もいる。二〇数年ぶりに是非お目

にかかりたいと思いながら、まだお会いできずにいるのが心残りでならない。

第二の糸は、海外見聞旅行である。一九六二年に、当時は神大文学部に在職しておられた社会・文化人類学の石川榮吉さんに誘われて、ポリネシヤに属するマルケサス群島のファツヒバ島で三カ月あまり原住民と生活を共にしたのが最初であった。その時、同行していた心理学の高木正孝さん（同じく文学部）が南太平洋上で船から転落して行方不明になったという不幸な知らせに大きなショックを受けたことも忘れえないが、このファツヒバ島での生活が私の好奇心をそそる契機となった。

したがって海外とはいっても、文明国や都会にはほとんど興味はない。一度だけヨーロッパ諸国を訪れたことはあるが、主要には南太平洋のポリネシヤ、ミクロネシヤ、メラネシヤの島々であり、フィリッピン、インドネシヤ、マレーシヤ、インド、タイ、台湾、中国など東南アジアおよびその周辺地域の国々である。それも観光客などの行かない、伝統的・土俗的な文化や生活が残っているところに興味がひかれる。それだけに苦しいことも多かった。山をこえ谷をこえて道なき道を、時には雨のなかを全身泥んこになりながら、目的地をめざして二日も三日も歩きつづけることもあった。「誰かに頼まれたわけでもないのに、なんでこんなしんどいことをしなければならないのか」という思いにとらわれたことも二度や三度ではなかった。それでも何か伝統的な行事などがあると聞くと、途中がしんどいからもうやめようと思いながら、行かずにすますとあとで後悔するのではないかという思いと好奇心にかられて、性懲りもなく

また山をこえ谷をこえて出かけていくという繰り返しであった。

しかし、私の好奇心を満たしてくれる多くのことを見聞できたし、数々の楽しみを経験することもできた。たとえばサモア、ニュージーランドのマオリ、インドネシアのトラジャなどでみられる趣きのある独特な住宅建築様式、ソロモン群島のマライタ島でみられる人工の小さな島々に住む人びと、ファツヒバ島で豚のウム料理をかこんで島民たちと催したカイカイヌイ（大宴会）、インドネシアのスラウェシ島の山中に住むトラジャ族の盛大な葬式、各地で語りつがれてきた特有な神話や伝説、これまた地域によって異なる日常的な生活用具や工芸品など枚挙にいとまがない。しかし、これらの伝統的な独特の土着文化も、文明とキリスト教の普及によって急速に破壊されてきており、やがて消え去ってしまうと思うと惜しまれてならない。もちろん、島民たちの生活は貧しい。しかし同じく貧困とはいっても、南太平洋の島々の貧しさには暗さや悲惨さは感じない。南太平洋の明るく澄んだ人びとの心情と生活が、東南アジアの国々にみられるような暗い陰惨な貧困で汚されることのないようにと願わずにはおれない。

第三の糸は、大学行政とのかかわりである。ちょうど年齢的にもその時期であったためか、いわゆる「大学紛争」の頃から急に学内行政にかかわることが多くなった。「大学紛争」に際しては、神戸大学改革準備委員会の一員として審議に参加するとともに、文学部内部でも学部長を補佐する執行部に加えられた。多くの学部が学舎を占拠・封鎖されたが、文学部ではその気配がなかったので、学部長事務取扱をしておられた清水正徳さんに同行して学舎増築の陳情

に文部省に行き、担当課長の前で「うちの文学部は封鎖されることはありません」と大見得をきって帰ってきたら、その翌朝早く大学から電話があり、「昨夜、文学部の学舎も占拠された」と伝えられ、我ながら情勢判断の甘さを反省させられるということもあった。

さらに一九七四年から八一年までは、引き続いて評議員、学部長、文化学研究科長などをやらされ、とくに文化学研究科（博士課程）の設置に際しての苦労は忘れられない。何回となく文部省に陳情に行き説明を繰り返しても、相手の担当官は黙って聞いているだけで何の反応も示さず、時には腹立たしい思いにかられたことも少なくなかったが、ひとたび設置の方針が上層部で決定されるや、今度は何回も文部省に呼び出され、いろいろと注文をつけられる。そのたびに連日夜遅くまで学部長室に居残って、改めて書類の作成や書き直しをしなければならず、「なんで俺だけがこんなしんどい思いをしなければならないのか」と考えることもあったが、事務長をはじめ庶務掛の職員の方々の協力と努力には頭の下る思いであった。その文化学研究科も、すでに発足して六年を迎え、軌道にのって順調に発展してきていることは喜びにたえない。

以上、当初から三本の糸を想定して書いてきたのだが、ここでふと、「教師としてのかかわり」という第四の糸がなければならないはずだということに気付いた。しかし私は、とうとう最後まで教師としては失格であったといわざるをえない。名前と顔をおぼえるのが、もともと苦手である。それでも社会学の学生諸君としばらく付き合っていると、名前も顔もかなり覚え

る。ところが困ったことには、調査などよほど特別なことがないかぎり、なかなか名前と顔が一致しないのである。それだけではない。卒業論文についても、学生諸君の方から自主的に相談に来ないかぎり、ゼミ以外の場で「ああしろ、こうしろ」などと言ったことはほとんどなかったと思う。「子供ではあるまいし、こちらからいちいち手をさしのべる必要はない」というのが私の考えであったし、私自身そんなことには耐えられなかったからである。しかし学生諸君の目には、さぞかし冷淡な教師と映ったことであろう。「ああしろ、こうしろ」と言われなければ自分では何もしようとしない学生、あるいは、いろいろと言われてもなかなか実行しようとしない学生が増えてきているという状況のなかでは、教師の方がそれに合わせて対応しなければならないのかも知れない。いずれにせよ私には、「教師としてのかかわり」などとはおこがましくて言うことはできない。

そうした私にも、再び教師としての勤務の誘いが幾つかの大学からあった。大へん有難いことではあるが、しかしすべてお断わりさせていただいた。何とか生活してゆけると思うので、退職後は一切の勤務＝拘束から解放されて、神戸と京都にある部落問題研究所を拠点に部落問題の調査研究に専念し、問題の早急な解決のために微力を尽くしたいと考えている。最後ではあるが、長年にわたりお世話になった社会学研究室の先生方のご厚情に感謝するとともに、卒業生ならびに院生・学生諸君のご健闘を祈念しつつ筆をおく。